

3	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14101003	先史アンデス社会における文明の形成プロセスの解明	加藤 泰建 (埼玉大学・教養学部・教授)	A
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、クントゥル・ワシ神殿遺跡に関する、①発掘資料のデータベース化、②関連地域の神殿遺跡の発掘と社会発展プロセスの検討、③神殿を核とする文明形成のプロセスの解明を目的として調査研究を行ってきた。それら3点につき、意見を述べることにする。</p> <p>①厩大な遺物資料を整理し、調査に関する情報や資料を網羅的にデータ化しており、ほぼ目的を達成している。今後、スペイン語圏・英語圏の研究者の利用に供する工夫が必要である。</p> <p>②本遺跡の発展プロセスを考察するために周辺地域の数箇所を発掘を行い、神殿が小規模集団と地域社会相互の物流・情報の交流に支えられていたことを明示している。</p> <p>③この種の広域型神殿がアンデス社会の文明形成の動因であり、広領域・大規模集団を統合する「権力装置」が存在しない点に文明史上の特異性があることを指摘している。この文明論は、アメリカ大陸の古代文明や人類史全体における文明の形成といった問題に如何に貢献するかが今後の課題である。</p> <p>本研究は、より精緻で体系的な研究成果を内外の学界に発信するなどの課題はあるが、1988年以降から蓄積されてきたクントゥル・ワシ神殿遺跡の全調査資料のデータベースを作成し、さらに文明形成の要因を明らかにしたことで、先駆的研究を進展させたものと評価できる。</p>				
4	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14101007	グローバリゼーション時代における国際犯罪と人間の安全保障に関する総合研究	上田 寛 (立命館大学・大学院法務研究科・教授)	B
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、当初「国際犯罪」と「人間の安全保障」を対象とするものとして提案されたが、実際の研究は「国際的な組織犯罪」を中心として遂行された。本研究は、国際的組織犯罪の現状に関する幅広い調査やシンポジウムを積極的に行い、とくに薬物犯罪と人身売買の現状把握の点で成果を挙げている。しかし、研究計画が「国際犯罪」から「国際組織犯罪」に事実上縮小された点は、当初の計画についての大きな反省材料として考えるべきである。国際犯罪の現状認識と関連問題克服の考察を通して人間の安全保障論に結び付けようという研究構想は、野心的であるが、実際の研究は、専門分野横断的で総合的な研究というよりは、各研究者の個別研究に重点が置かれる結果となったため、主要テーマ間を関連付ける明確な視座を十分確立するに至っていない。研究成果の公表は、講座シリーズ等として一部公刊されているが、終了評価の時点では、刊行予定のものが多く、この点も研究計画遂行上の反省材料である。</p>				